

# T A O G G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

古田武彦氏新春講演会

## 矢印はどちらを指すか

堯・舜の中国と縄文の日本列島

一月十四日午後、恒例の本会主催古田武彦氏新春講演会が文京区民センターで行われた。会場に溢れる三百名の参加者を前に、今回は、日本列島の縄文文明が、中国の古代文明の形成に、何らかの影響を及ぼしたのではないかと、従来の学界通念から見れば驚くべき提言がなされた。以下その講演の要旨。

### 東京を離れる挨拶

お休みのところを私の話をお聞きに、会場に溢れるほどおいで下さいましてありがとうございます。今回はとくに、今年三月を以て昭和薬科大学を定年退職して京都に移転することになりましたので、東京に居て東京の方に講演するのはこれが最後になるのではないかと思います。その点とくに感慨深いものがあります。

昭和薬科大学から招かれました時には大変緊張して「迷った」といってもいいでしょう。今まで通り文字通りの在野でおるべきか、大学の教師の座に就くか―その点こちらに来る

決断をしましたしたのは、私が関東・東北について余りにも知らない、生まれは会津の喜多方で大学は仙台でしたが、あまり接する時間がなく、知らない事が余りにも多い、その点東京に住めば分かることがあるんじゃないかという期待があったのです。その期待は思いがけない私の予想を遥かに上回る形で実現されました。例えばこの「和田家文書」、東京にいたからこそしばしば青森に通うことができ、和田喜八郎さんも上京のたびに訪ねて来る事が可能でした。また関東を去る時になって驚天動地の発見がありました。これは後半にお話いたします。これは皆「多元的古代」研究会・関東の皆様のおかげ、東京古田会その他の方々のおか

げであり、また儀礼的な文句ではなく、本気で申すのですが、昭和薬科大学のおかげだと思えます。在職十二年間、全く自由に、何等の制肘を加えられないことがありませんでした。稀有のことと感謝しております。

### リスクを冒す

最近テレビで経済問題の討論会を見まして、野村総合研究所の鈴木徹夫さんという方が、「今の経済が良くなつていく可能性はあるけれど、足らないものがある。それは経済人がリスクを冒す勇気を持っていないことだ。本来経済活動とはしっかりと見通しの上に立ってリスクを冒す事がなければ、本当の活力は出て来ないのだ」ということを言われました。私は経済は素人ですが「良いことを言われるな」と思って聞いていました。同じように、学問の世界・歴史学の世界で、リスクを冒すことがなくなつたらその学問は進展しないと言っているでしょう。定説や通説の上に乗ってその範囲内で研究するというのでは、それだけしかやらないようでは、その学問は大局的に停滞の一途を辿るようになります。

定説・通念を尊重し研究した上



で、それで理解できない現象が現れたとき、新しい仮説を立て、検証を重ねて行けば、そのときには馬鹿にされることもあります。新しい視野が開けることもあるのです。その勇気を持つ研究者がいなければ、その学問は終りだ。その国家・社会も停滞する……その点、今日申し上げる話は大変従来の通念を打ち破る話が続出しますので、大いに眉に唾をつけて聞いていただきたいと思います。(笑)

## 縄文と旧石器

縄文土器についての私の考え方があります。

今まで繰り返し申し上げているテーマですが、縄文土器はズバ抜けて早く、日本列島で生まれた。これはリビー博士による放射能測定で判明して来たのですが、一万二千年前の測定値を示す土器は長崎県の福井洞穴・千福寺洞穴から北海道まで、至る所で出土しています。最近では沿海州の日本海岸部でも同じレベルの土器が出ている。この点を指摘して「土器は大陸から来た」とTV番組で喋っていたアナウンサーがいましたが、思い違いでありまして、縄文文明は日本列島内に止まってい

で、沿海州を含んで日本海両岸に跨がって発達したことを示しているに過ぎないのです。さらにそれらに飛び抜けて神奈川県の大和市には、一万四千年前の無文土器が出土しています。それよりさらに古いものとして、長野県下茂内遺跡から出た、「土器片とおぼしき物」があります。土器片かどうか確かでない。私も眼をすりつけて見たのですが、要するに人工の物であることは間違いありません。しかし全体で二片しか出ていないので、土器であるかどうか分からない。私はこれを「土器形成期」と名づけました。大和市の土器はその最終局面なのです。

旧石器時代の人類が火山から溶岩が流れて粘土質の土を焼いて化学変化が起きるのを見て、見習って火によって粘土を焼いて、土器のような物を造った。大自然がお師匠さん、人間が生徒だと。しかし、始めからちゃんとした土器ができるわけはないので、始めは土器とも何ともつかない物を造っていたのではないでしょう。それが何百年何千年続いて、初めて器を造るようになる。その期間を私が勝手に「土器形成期」と名づけたのです。

不思議なことにお隣の中国では最も古くても、八千年前の物が二カ

所出しているに過ぎないのです。江南近辺ですが、二件に過ぎない。有名な会稽山のそばの河姆渡遺跡でも六千六百年前、もっと新しいのです。八千年でも大和市から六千年、列島一般のレベルからでも四千年新しいのです。韓国でも日本の縄文土器にそっくりな物が出ておりますが、日本を上回る物はないようです。だいぶ時代が遅くなります。このことは現在、疑いようのない事実なのです。

## 芹沢長介さんの述懐

十数年前、仙台へ行って、芹沢長介さんという東北大学の考古学の教授、明治大学を出て縄文文明についての数々の業績を挙げられ、最近ではお弟子さん達が北京原人より古い、六十数年前の旧石器時代の遺跡を発掘されましたね、そのお宅に伺って、博多湾岸に能古島から、黒曜石がたくさん出る、その谷ごとに黒曜石の種類が違う。島は黒曜石の産地ではないのですが、それをどう考えるべきか、ということ聞きに伺ったのです。それに対する回答は簡単でした。「いや、私には分かりません」の一言。用件はそれで済んでしまった。ところがその後、私に對

して大演説を始められたのです。

「自分は今困っている。長崎県の福井洞穴で出てきた土器について放射能測定してもらったら、一万二千年前という結果が出て、学会に発表したら、考古学会の学者達が大変な中傷攻撃を行う、『芹沢は変なトリックを使ったに違いない、芹沢は皇国史観・右翼思想の持主に違いない、だから日本が古いと言いたいんだ。』と、完全に干し尽くされてしまった。非常に辛い」と話され、「しかし私はそんな国粹主義者などではない。いまに中国からずっと古い土器が出てくると信じている」と、二時間近く熱弁を振るわれたのです。それは貴重な体験だったと思います。当時の考古学界の状況を示すものです。ところがそれから十数年経ちますが、芹沢さんの期待に反して日本を遥かに越すような中国の土器は現れない。逆に日本の出土の方がどんどん古くなっていく。落差はむしろ開いているのです。こういう状況にあるわけです。

## 土器文明の成熟と伝播

ここからは私の考えですが、学問は現在の出土状況をもとに考えていくべきで、「将来出るに違いない」





講演中の古田武彦氏

ということをもとにしてたら、誰でも想像で議論できる。これは学問とはいえない。現在の出土状況を元に立論すべきである。そういう立場に立つと、圧倒的に日本列島が古く、周辺部は新しいのです。中国でも東北部では古い物が出てきましたが、まだまだ日本列島には及ばない。

これは別に不思議はないであろう。なぜなら日本列島は火山列島である。火山は至る所にある。旧石器人にとってのお師匠さんはどこにもある。それに対し中国はごく少ない。朝鮮半島には少しあるが、日本列島に比べれば微々たる物です。沿海州にももちろんない。土器が日本列島で早くできたのは当然で、日本列島に住んだ人間が特に優秀だったわけではないのです。

もう一つの理由は海流である。黒潮の本流と、分流である対馬海流に囲まれている。海流を横切る時往々にして流される。青木洋さんという

ヨットで世界一周された方にお聞きしたのですが、その場合生き延びるために必要なのは一つは釣針、魚を釣って食べることができず。

もう一つ大事な物が壺である。一週間に一度ぐらい太平洋の上にはスコールがやって来る。それを容器で受ければ次のスコールまで飲み継ぐことができる。ところが南方では大きな貝とか椰子の実などの容器が手に入りますが、日本列島では沖繩あたり以外にはありません。ですから生命維持のために壺を作るのは自然なのです。火山爆発・海流、決していい条件ではありませんが、そのために早くから土器が生まれた。

これに加えて、微妙な問題を提起してきました。それは「旧石器人の成熟」という問題です。火山と海流が揃えば土器の発明ができるならば、日本列島の旧石器人はもっと早く土器を作っているはずですが。しかし実際には一万六千年前までできなかったのです。それは単純な自然条件だけでなくて、旧石器人が成熟してその条件を受け止めるようにならないければ、土器の発明には至らなかったのです。

このように土器が日本列島は早く中国や沿海州は遅れている、このことは土器が日本列島から大陸に伝播

した、という概念が立てられると思います。そうすると、恐るべき問題が伴って参ります。土器が伝播する時に土器だけが動くことはまずありません。必ず人が持って行く。人は言葉―日本列島縄文語―を喋る。風俗習慣を持って行く。神さんを持っている。神話を持っている。そして勿論土器を作るノウハウを持っている。これを土器のノウハウだけを受入れて他の一切は受入れなかったなどということは想像できません。土器は物凄い先進文明で人類にとって独創ですからね、これに比して金属器は、土器を材料だけ変えただけで容易に類推できる物でしょう。

その証拠は日本の弥生時代の金属器の受容の時のことを考えれば分かります。中国文化・漢字文化が奔流のように日本列島に入ってきて、今なおその影響は至る所にあります。そのことは中国から銅器・鉄器が入ってきたことを抜きにして考えられない、これが自然な姿です。

としますと、縄文時代には同じことが起きていて当たり前、起きていないと言うためには、こういう特殊な事情があったからと証明が必要になってきます。つまり、中国・韓国・沿海州の文明の根底には縄文文明があった、というテーマです。

驚かれるでしょうが、私が長いこと考えてきた筋道で、疑いのようなことだと思ふのです。

それは一般論である、ということも言えるでしょうが、これが一般論に止まらず、具体的な証拠が見付かってきたのです。

### パラウ漂流記と二倍年曆

倭人伝には二倍年曆があったことが書かれています。そのことは私は今まで繰り返し立証してきました。しかし去年、「江戸時代パラウ漂流記」という本（高山純著、三一書房）が出たことを多元の会の斎藤里喜代さんから教えられました。これによりますと、パラオでは一年が二つに分かれる。東風が吹くときと西風が吹くときに分かれるのです。乾季と雨季もそれによって分かれる。六か月ずつに同じ月の名前がつくそうです。

同じようなことがインドネシアでもありまして、多元の会の下山さんが仕事でインドネシアに赴任されたとき、前任者に真っ先に言われたことは、「ここでは一年とは半年のことです。このことを心得ていないとここでの仕事はうまくいきません」ということだったそうです。その時



の気象のデータもいただきました。パラオからインドネシアにかけて同様な風土があるのです。

そうしますと、私が倭人伝でぶつかった二倍年暦の問題にも、新しい観点が開けてまいります。

### 文明の基準尺をなす暦

私が去年まで悩んでいましたのは、何で日本列島に二倍年暦などというものが成立したのか、ということ。元来暦法とはその場所の気候風土に適合していなければならぬ。日本のように季節の変化のはっきりした地域で二倍年暦は発生しにくいと考えられます。それに対しパラオやインドネシアでは夏と冬の変化が少なく、僅かに風向きの違いと乾季と雨季の差がある所で、二倍年暦の習慣が起りやすいと考えられます。

となると、日本列島の二倍年暦は日本で発生したのではなく、パラオやインドネシアで生まれたものが黒潮に乗って日本列島に到着した。その時、土器と同じように暦だけが来るわけではないので、それを持った人間が来ているわけです。

倭人伝とパラウ漂流記の類似性や関連については、前回にも話しまし

た。朱や染料を使う習慣、入墨の場所やデザインで身分や地域を示す習慣、一夫多妻の習慣、などについて。ここで売春宿の記事で一人の男が面倒をみて、不法に支払いをしない客に対して交渉までするという事から倭人伝に「男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え、居所に出入す」とあるのを思い出しました。卑弥呼は売春をすることはないでしょうが、この「男子一人」というのが、大変よく似ています。

また八丈島の博物館に行きました時、高床式住居の写真がたくさん展示してあるのを見ました。八丈島、沖繩、パラオ、その他太平洋上の島々皆同じ風習です。そこで私はアツと思ったのです。倭人伝の中に高床式の建物と思われる宮室・楼観・邸閣などがあります。あれを私は中国式の風習だと思い込んでいた。しかし本当は南方の風習だったので。倭人伝の下戸は北方系で大人は南方系だったので。「南方民族征服説」ということをこの前お話ししましたね。

### 黄帝・堯・舜・禹と二倍年暦

なぜこの事を再び持ち出したかと言いますと、司馬遷の『史記』五帝

本紀に黄帝・堯・舜・禹の年齢が書いてある。黄帝が百一十一歳、堯は百十八歳、在位九十八年。舜が百年、九十歳で天子になっています。禹が百歳。とてもリアルには見えない。九十歳で即位など、ばかなと思えますが、二倍年暦では四十五歳、あり得ることですね。

ですからこの四人は二倍年暦である、ということは今までに言ってまわりました。しかし堯・舜・禹は縄文中期の後半の後半ぐらい：夏・殷・周三代の周はBC一〇〇〇年から、殷はBC一五〇〇年前後、夏がBC二〇〇〇〜一五〇〇前後に当たると思われます。夏の前の四人が縄文中期の後半に当たるといえるのはそういうことからです。

さて二倍年暦が始まったのがいつかというところ、決してそんなに新しいものではない、旧石器・縄文以来の暦法が弥生時代に残っていて、魏略の記事として現れたという方が可能性が高いのです。

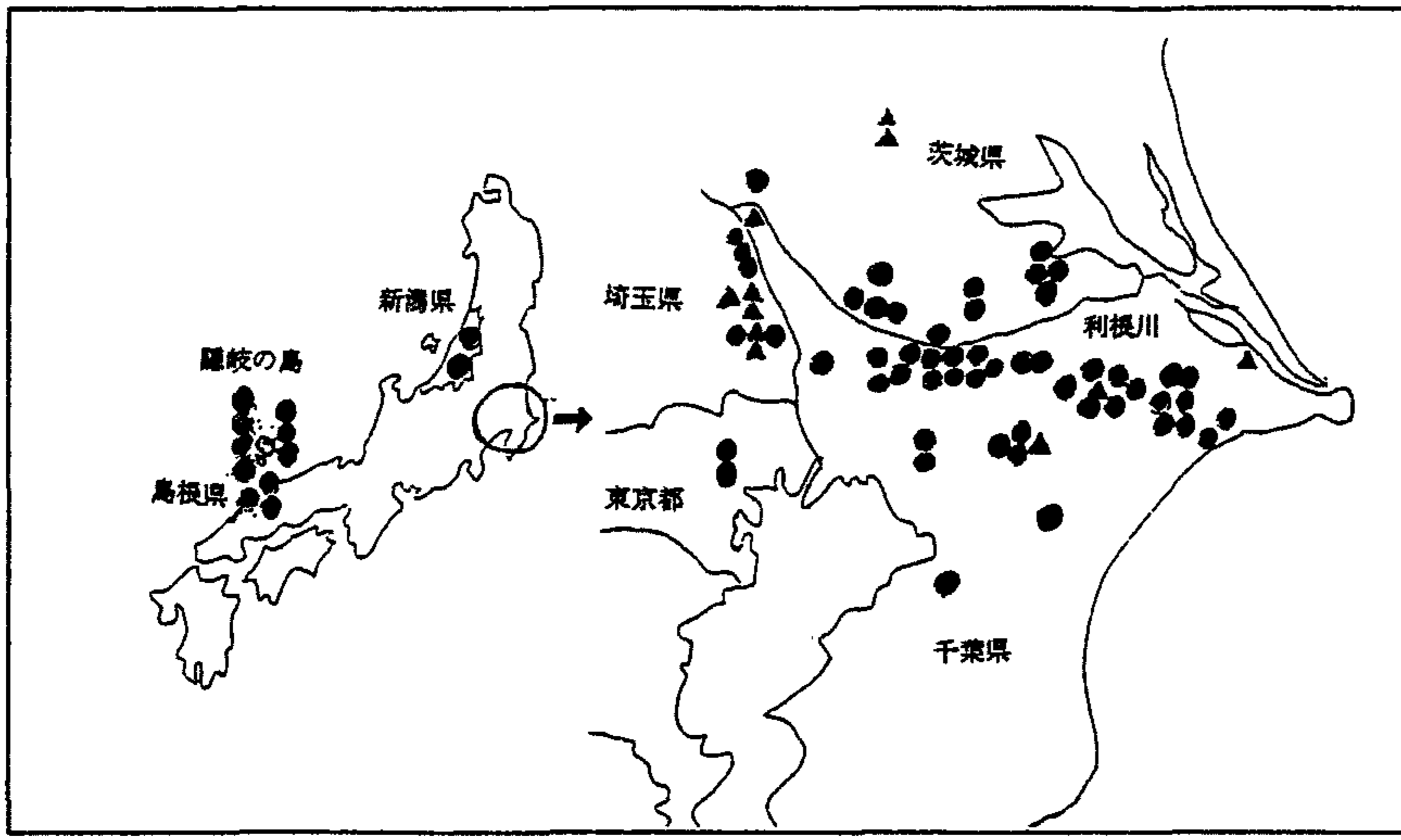
縄文中期は日本の縄文時代の真つ盛りですが、その時二倍年暦だった、海を隔てて向こう側の中国も二倍年暦だったとなると、偶然の一致とは考えられない。その場合矢印は、日本列島から中国へか、中国から日本列島へか。

このような場合、戦後の学界では中国と日本とに共通の要素が発見されたら、即中国からの影響としてその論証は要らない、という習慣があります。しかし学問は論証で成り立っている。この場合も両者共通なら偶然の一致かどうかを検討し、関係があれば矢印の方向を検討する。結論が出なければ「分かりません」と言えはいいのです。この場合、縄文中期に両岸に二倍年暦があったと考えざるを得ないのだが、どちらからの影響か。大勢論から言えば日本列島の土器は古く中国の土器は新しい、日本からの伝播ではなからうかと心中考えてはいました。しかし分かってきました。パラオ・インドネシアから日本への伝播は明らかです。だとしたら日本から中国へ向う方向を想定する方がよりナチュラルでしょう。つまり、黄帝・堯・舜・禹は、縄文文明の影響下にあったのです。中国古代史をやっているかたも聞いたこともないテーマでしょう。私も言うのが怖かったし、ためらいがあったんですが、パラオの例を見てからは迷わなくなりました。

### オビシヤと三足鳥

市川市に住んで民俗学を研究して





三足鳥オビシヤ行事の分布 萩原法子氏作図による

おられる萩原法子さん（この多元の会でも昨年三月の会合にお招きして、お話を伺ったようですが）が『日本民俗学』平成五年二月に、「弓神事の原初的意味をさぐる―三本足の鳥の的を中心に―」という論文を発表しておられます。それによると三本足の鳥を描いた的を射る神事が関東地方の一画、とくに千葉県北部・茨城県南部を中心に、濃密に分布している。あと島根県で隠岐の島周辺にまとまってあり、新潟県に二か所、という分布です。萩原さんは中国文献に太陽に三本足の鳥が出て

くると知って、大変興味を持って、平成二年から精力的に調べてこの分布図を作成されました。

これは三本足の鳥が的に描かれていまして、それを弓矢で射る、というのが一般的な形だそうです。足が三本で、さらに指が三本、書き方はいろいろあります。なかには三本足が二本になっているものもあるようですが、基本的には三本足の鳥が活躍するので。

私は一月三日・七日に見学に行つてまいりました。三日は星宮神社にまいりました。七日、惶根神社は鳥が出てきましたが、星宮は出ませんでした。七日には八日市場市の椿にある星神社。この事を話しますと、一メートルほどの的に三本足の鳥が描かれています。小学校一年生・二年生・三年生の子供が順次役割を分担しまして、一年生が弓を持つ、弓は桜の木を使いますが、これは持つだけで矢を射ることはありません。二年生と三年生が矢を持って、的を突くのですが、世話焼きさんが指導して一回目は鳥の描いてない所に当てます。それから的の回りをぐるりと回って、三回目に鳥の目に突いて、それで終り。最後に的を高い急な階段から突き落とすとして、その落ち方で今年の収穫を占う、というこ

とになっています。

萩原法子さんの論文の趣旨は、中国で三本足の鳥が出てくることは有名である。山海経・淮南子などもあり、曾侯乙墓が発掘されたときは帛（絹）に太陽の中に三足の鳥、月中に兎とヒキガエルが描かれている。そういう例を挙げて「中国思想が日本列島の祭りに現れている」と結論付けておられる。

### 中国風か縄文風か

この研究は非常に素晴らしいものと思うのですが、結論については疑問を持ったのです。去年の暮に萩原さんと電話でお話しまして、「そのお祭りは中国風のお祭りですか、縄文風のお祭りですか」と聞いたのです。電話の向うで萩原さんがちよつと絶句しておられました。三足の鳥は天然にはないでしょうから、両方で偶然に創造されたとは考えにくいし、お祭りが中国風のムードを持ったものでしたら、そこに三足鳥が出てくれば、これは中国の影響だとして良いでしょう。しかし祭りの道具だてが日本列島の縄文以来という素朴な姿でしたら、そうは言えませんが、だいたい曾侯乙墓の鳥はたぐさんのデザインの中のごく一部で、こ

れの中から鳥だけを選び出して使う、他の一切、兎もヒキガエルも捨てて、取り入れないというのは理解できません。

これに反するケースとして長崎の龍蛇のお祭りがありますね。あれはどう見ても中国風ですね。中国から伝わったことに少しも疑問を持ち得ません。地理的にも中国に近いですし、ところがこちらの祭りは九州になく、四国・近畿以西にもない。隠岐の島にあります。中心は明らかに関東である。中国から来たとするば、どうして関東が中心になったのか。

次は矢印。萩原さんは学界の前提に従って中国起源とされたのですが、そういう問題があるのです。また『山海経』や『淮南子』などには鳥についての言及はありますが、三足であることは後世の注で書いてあるだけで本文ではありません。もう一つ、『春秋』に三足鳥の記事があり、これがもっとも古いのですが、これも現存の『春秋経』には出ていないで、散逸してしまっている『春秋緯』の『元命包』の文章が『古字通』に引用されて残っているの『春秋緯』にそういう文章があったことがわかるのです。『春秋』を書いた孔子は縄文晩期の人、お祭りは



二〇世紀のものだから矢印の方向は決りだと言うかも知れませんが、祭りの方の内容も相当古いのです。七日には、同じ日に同じ祭りが行われるので、多元の会の世話役の方にもあちこちのお祭りを手分けして見ていただきました。(8ページ参照)

椿の星神社では弓がありながら矢を持って突くのです。これは弓の発明以前の儀礼の姿を伝えていると考えることができます。また的は明らかに太陽でして、射日神話ならぬ射日儀礼である。私はそういう判断に到達してきました。

### 義仲は関東に来たか

ではなぜ日本列島から古代中国へ三足鳥の神話が伝わったのか。それは文献上の徴証があります。

尚書「堯、義仲に命じ嵎夷に宅らしむ」「…嵎は海隅、海に突き当たった土地、日が出る土地のこと…」と説明がついています。ですから東のかた、日の出る所ですね。堯の偉いところは先進文明の中央に自分の家来を派遣してそれを学ばせ取り入れようとした、という風に書かれているのです。その場所を湯谷(ようこく)という。太陽が出るのでのち

古いかと思っていたのですが、良く読んでみると古い写本には「湯谷」と書いてあるようです。

ですから湯の出る谷であつて、そこから東は海である。この点、以前から関心を持って、嵎夷・湯谷とは日本であろうと考えてはいたのですが、日本のどこかが分からなかつた。それが今回分かり始めてきた。

初めは九州ではないかと思つてきたのです。ところが今回考えてみると、日本は中国に先進する縄文文明の地である。特に縄文中期の終りに出た堯にとつては輝く文明の地、そこに義仲を遣わすのに、日本列島ならどこでも良い、九州が近いから…と考えたでしょうか。もちろん日本列島至る所に縄文土器があります。一万二千年前には福井洞穴から北海道まで既に縄文土器はあるわけですが、その中でも最初の誕生地、神奈川県大和市に代表されるのが関東・信州である。義仲はそこへ学びに来たと理解することはできないか。

こうなると思いがけなく湯谷の地とは関東ではないか。

若干思考の流れについてお話ししますと、箱根に大涌谷・小涌谷があります。涌は「よう」ですから「ようこく」ではないか。また「上に扶桑

の木あり、下に湯谷あり」という説明もあります。扶桑の木の上に三足の鳥がいるというのです。その辺からすると湯谷とは関東平野全体ではないか。我々は関東平野を谷などと思つたことはないですが、山海経や淮南子などの巨視的な視点から見ると、昔の堆積の進んでいない、群馬県あたりまで海があつた、しかもその周辺には草津から伊豆まで、また栃木県まで、温泉がたくさん湧き出している、温泉に囲まれた谷と言えないのではないのでしょうか。そうすれば千葉県のあたりが扶桑の地とも比定できないでしょうか。「ふ」を語幹とした地名も多く見られるのです。大漢和によると「桑」の古字は三つに分かれた枝がさらに三つに分かれた形をしているようです。これは三足鳥の指がさらに三本ずつある形に良く似ています。まあこんな事から断定的な話ができる状態ではないのですが…。

とにかく関東は縄文文明の発祥の地であり、堯が義仲を遣わした当地である、と理解することができると。東京・神奈川県から東に千葉県があり、その向こうから太陽が昇ってくる。このように関東地方的な視野で見るとこの話が理解できる。

さらに時代は黒曜石の時代で、関

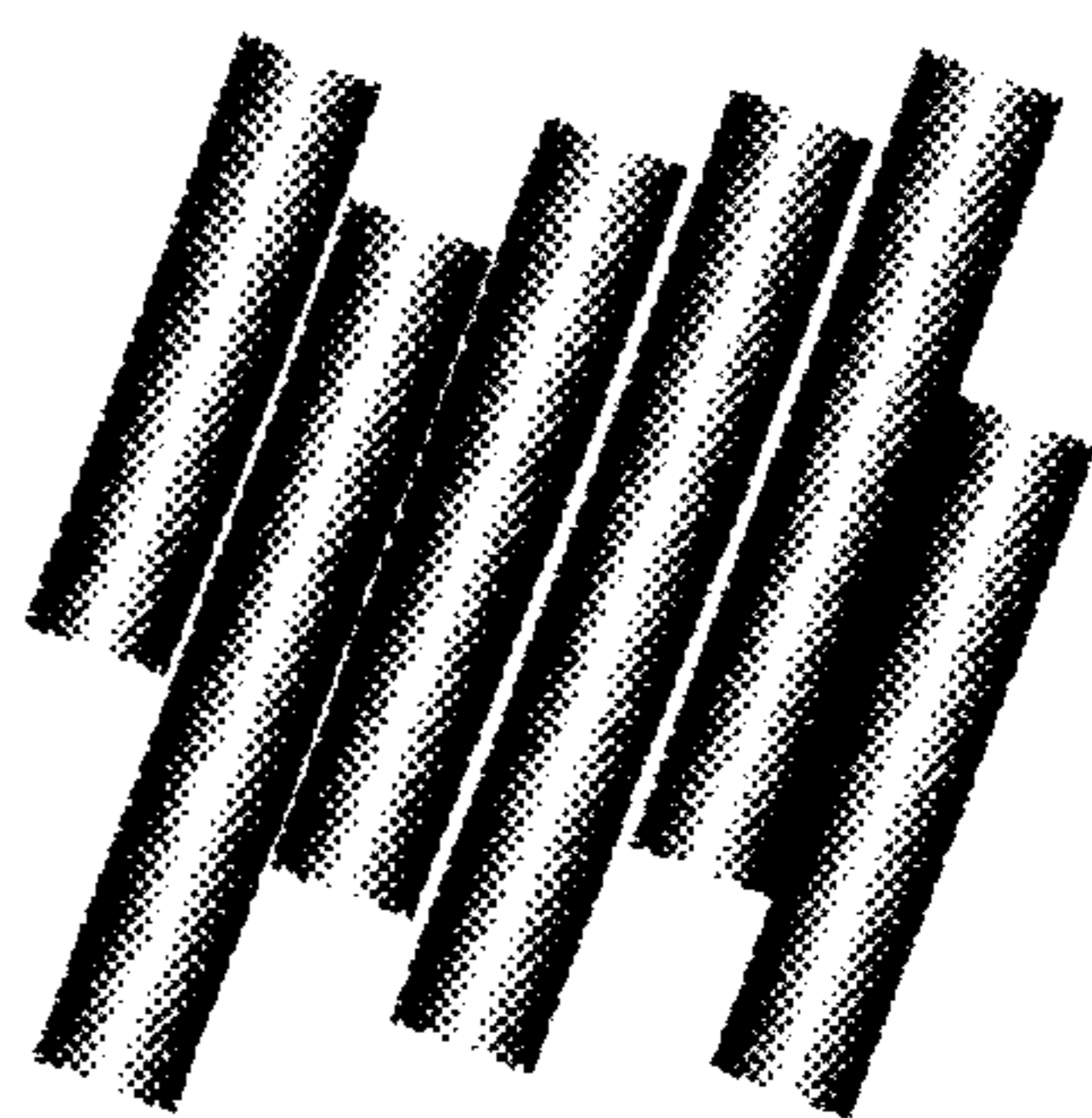
東平野は黒曜石平野と言つて良い。栃木県に高原山、南には神津島あり、伊豆半島あり、信州に和田峠あり、黒曜石産地に囲まれた平野である。一方出雲の隠岐の島にも黒曜石が産します。関東から隠岐へ飛んでいるオビシヤ祭りの分布にもこのような背後の理由があるのです。

漢字で貴重な品を表す字に玉偏の字が多いことは御存じの通りです。また貝偏の字が貴重品を表すことは「財寶」という字で明かです。日本列島は貝塚列島であり、中国にも山東半島など一部に見られます。海を挟んで両岸に貝塚があることは重要です。いずれにせよ、シルクロードの彼方の玉の産地、海岸部の貝の産地、それらの先進文明に刺激されて、さらに金属器の文明が開いて、摺合して中国の古代文明が起つたことは疑うことはできません。中国文明は偉大ですけれど、最初から偉大だったというのは中華思想・イデオロギーに過ぎません。ローマは一日にして成らず、周辺文明の摺合・集大成の上に成立したと見るのが知性的な理解ではなからうか。そう考えるのが当然だと思えます。

(まとめ・安藤哲朗)  
(以下は、本誌次号に続きます)







山田宗睦

## 日本書紀講座

第十四回(十月) 第十五回(十一月)

## 本文と一書の関連を読み抜く

第五段の一書の残りとは第六段の本文へ進む。

一書の数が多いが、似たような内容だと思ってしまうように、と念を押された。一書同士の違いから発見できることが多いからだ。第五段の一書群はイザナキとイザナミの物語であるが、表面的に似た内容でも細かくみると違いが多く、問題発見の宝庫といつてよい。そのカギはキーワードの解説にある。まず、族(うがら)、情(あるかたち)という読み。イザナミは貴方というところを族といっているが、これは「う」プラス「から」ということで、「う」は氏(うじ)の「う」と同じ、「から」は血縁を意味し、蒙古、朝鮮經由の言葉である。イザナキとイザナミが同母の兄妹であることを自ら語っているのである。また、「あるかたち」という読み。これは実情ということだが、折口信夫は見当違いの

解釈をしている。イザナキは実情をみたことを慙じると表現している

が、これは心が切られるように恥ずかしいという意味である。この字は書紀の中でどういふ場合に使われているか、古田さんが三国志の臺の字をすべて取り出して比較した、あの方法が最適と思う。神代の巻ではトヨタマヒメがヒコホホデミに出産の姿を見られたときに使っている。トヨタマヒメはのぞくな、といったのに見られた、恥をかかされたのである。イザナミの実情とは、腐乱した死体という意味である。もつとも、折口信夫は禊を手伝う神、菊理媛神については「水の女」でみごとな解釈をしている。これは折口さんの最高傑作であると思つていい。イザナキは禊をするために橋小門に帰るが、第六の一書では上つ瀬、下つ瀬と抽象名詞になっているのに、ここでは粟門、速吸名門と固有名詞にな

っている。速吸名門は神武東征にも出てくるが、通説では豊予海峡とされる。しかし、私はかねてからこれは関門海峡、神武は博多湾岸から出たという主張してきたが、古田さんも最近、宮崎出發説からこちらに改められた。

第六段の本文の主人公はスサノヲである。スサノヲが母親イザナミのいる根国へ行きたいと姉アマテラスに言い出すことから始まる。このキーワードはまず高天原である。意外に思われるかもしれないが、書紀本文には高天原は初登場なのである。しかも地の文ではなく、スサノヲの言葉として。地の文には「天(アマ)とあるだけだ。これまで目にした高天原は一書の中であつたことを確認したい。高天原は普通名詞ではないかと考えられる。古事記では固有名詞であることは明らかだが。大体、イザナキ、イザナミはずっと地上にいたのである。

ここまでの構造を振り返ってみると、1. 初夜神話、2. 国生み、3. 三貴子誕生、となる。しかし、もとの倭国史には国生みの話はなかったと思う。イザナキ、イザナミは始祖ではなく、大和朝廷がつけ加えた。倭国神話はヒルコ、ヒルメ、ツクヨミの形であつたが、大和朝廷が

アマテラス、ツクヨミ、スサノヲの形に作り替えたと考えている。さらにいえば、記紀神話は弥生時代を反映するもので、縄文の影響はないというのが私の考えだ。書紀のこの辺の文章は神代的文章ではなく、漢文調の律令的文章である。良くも悪くも律令官僚の教養、地肌を感じさせる箇所といえる。特に「夫れ」と言つた表現は「凡条」「夫条」と称される典型的な律令的文章である。スサノヲの挑戦的な姿勢に対するアマテラスの応戦振りの描写は律令的講談といった調子だ。ここで、アマテラスとスサノヲは誓約(うけい)をするわけだが、スサノヲは男の神を生んで邪心がないことを証明した。素直に読めば、誓約はスサノヲの勝ちであり、天皇の祖先ということになる。それを官僚の精神でねじまげたのではないか。

■ ■ ■  
昨年末の朝日新聞で日本書紀の注釈に取り組む山田先生の近況が報じられました。この講義も正に佳境に入ってきました。タカミムスヒの位置、アマテラスとスサノヲの関係、折口説への批判と評価、面白いの一語に尽きます。(木村由紀雄)

【2月11日の講義は、先生急用のため休講、次回は3月10日】







共同調査

## 関東の弓神事

# オビシヤを探る

多元の会会員の共同調査です。

まとめ・富永 長三

以下、その報告です。

◇初めに◇

昨年三月の発表と懇談の会で、民俗学研究者萩原法子氏をお招きして、「弓神事の原初的意味を探る」と題して、オビシヤのお話を伺った。

萩原氏の論文「弓神事の原初的意味を探る……三本足の烏を中心にして」を読まれた古田先生は、「三本足の烏を的にするオビシヤの分布の偏りと、中国の古典に見る「三本足の烏とひきがえる」のセットと、日本列島での「三本足の烏と兎」のセットとの違いから、オビシヤが中国からの伝播とすることを疑問とし、今回の調査となったのでした。

その詳細は、本誌の講演録をご覧いただきたいが、このオビシヤの行事は比較的年初に集中し、同じ日にあちこちで行われることが多い。したがって、多元の会世話人らが手分けして実際の情報を収集することになりました。



### 1 貴船神社のお的

一月四日、お的の神事を見るために貴船神社（千葉県東金市山田）を訪れた。祭事は十時過ぎ開始。氏子の人々が神主に社殿に招じ入れられ着座する。（社殿に入る前に桶の水で手を洗い、桶の取っ手の端に吊した白紙を一枚づつちぎって拭いていた。）講中の人々は外で焚火に当たりにながら待機していた。神主の祝詞の後、氏子がリレー方式で大根、蕪、白菜等を神前にお供えする。その後一同酒を飲み、つまみを食べる。お的の神事が始まったのは、十一時頃、十八分程で終了した。

お的の神事が始まる時刻が近付くと、社殿外の人々が、かねて用意してあった杭に、的を取り付けた青竹

を結び付けた。的は割竹で六角形に編み白紙を貼り、中心に黒丸、外側に太く墨で円を描き、その線上に右上と左下に一羽づつ合計二羽の三本足の烏を描く。弓の木は梓（ウシゴロシ）の由。極めて素朴にして、ゴツイものであった。矢は平年は十二本、閏年は十三本用意する（矢羽根は白紙に墨線で羽の如き模様を書く）。この他白紙の矢羽根の矢が一本、したがってこれを入れると平年は十三本、閏年は十四本になる。弓を引くのは旧年中に仲人を務めた人とその息子（と云われたようであるが、市報・ふるさとの文化財では、両親健在の嫡男で紐解を済ませた十五歳までの男子）と云う。

最初は白羽の矢を射た。三本目あたりを射かけた時、ヴェテランらしき人が「とにかく先ず的を射破るんだ」などと言いながら、矢を手に持つて的に歩み寄り、的を突き破った。以後は次々と矢が射放たれたが「苦勞して的を作ったんだから、ちゃんとのに当てろよ」などの野次が飛ばされた。射られた矢は、人々が奪い合っていた。

矢が全部射終ると、的が片付けられ、講中も三々五々引き上げて行ったが、氏子は再び社殿に入り、飲食がさらに続いた。

貴船神社のある山田の地理的条件は縄文海進時には、海が真下に迫っていたはずである。このことは、講中に漁師が多いとか、貴船神社が漁業の神、水難の神であることには何らかの関係があるかも知れない。また山田には、山田水呑遺跡や山田台遺跡があり、古来人々が多く居住した場所と思われる。（上林昌太郎）

### 2 香取神社お備射祭

流山市平方香取神社では、弓を射る事そのものはお的（まと）と言っている。一月四日に当番（十名）がお備射の時間を決める。今年は一時。日は毎年一月七日。

昔は当番が前日に山へ行って、弓の材料の「うしつころ」の木の枝と矢の材料の篠竹を取ってきたが、開発で山がなくなり今は特注の四尺の弓二本と本物の矢十本（鏃なし）を氏子総代（四名）の代表が保管し、当日当番に渡す。弦は麻縄を当日張る。

的は直径五十センチで厚み二センチ（二センチ幅の平に伸ばした竹を輪にして、同幅の竹を十文字に中へ入れる。）紙は障子紙を張る。

絵は真中の丸の上に飛ぶ烏、右下



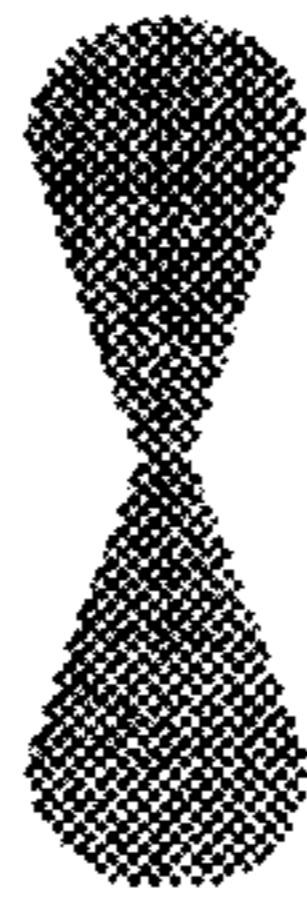


千葉県沼南町香取神社のオビシヤ

に枝はないが、とまった格好の鳥、左下に地面に降りた鳥と三態が描かれる。萩原法子氏の写真は爪三本だが、今年は後の爪もあり、四本だ。巖島神社によく似た四本柱の鳥居にはお正月の注連縄が掛っているが、もう一本お的の注連縄を張る。注連垂れ（しめつたれ）四枚は氏子総代の所へ当日もらいに行く。鳥居に三本の綱的を張るのだが、神社側から鳥居的を射るので、的は午前も午後もずっと逆光であった。昔は太陽と的が近かったのでは…、時間を決めるといのは太陽の向かって射るようにしたのでは…、と想像力が働く。

扶桑の桑の字は、三本指の手が三つあり、その下に木と書く。三本の手の位置は、この鳥の手の位置と同じく上一つ、下二つである。太陽の三本足の鳥の原形は三本爪の鳥ではないだろうか。扶桑が中国で東海の日の出る所にある神木というなら、ズバリ桑の木で蚕の木ではないだろうか。つまりシルクロードの本場の中国に三世紀の倭王が絹をおみやげにした理由も中国より扶桑の方が絹の元祖であったのでは？ 長幡神社、静神社、蚕影神社、蚕養神社、全部茨城県にある神社である。もちろん、北九州と関東が親しい関係にあるとして。（斉藤里喜代）

### 3 星神社の的



「ヨイヨイ、ヨイヤサ」と掛け声と共に突き出される豆腐田楽、次は牛蒡田楽、いづれも身の丈よりも長い細竹の先に藁を巻き付け、若松、あるいは梅の一枝を飾り、田楽を挿して居並ぶ神主、世話役に突き出す。そうしてその度に一献と続き、七献の謡い（今年は省略）を以って儀式は終り、「お的」に移る。

一月七日、千葉県八日市場市椿の星神社を古田先生と共に尋ね「お的」を見学した。

日本列島に初現する土器、その土器文明の中国への伝播は既に古田氏の説くところであった。火山と海流の交点に旧石器人類の成熟、この三点が土器出現の要因である。そして旧石器人類の成熟とは弓矢の発明を以って言える。弓矢の発明によって余剰の蓄積がなされ、人類は新たな工業製品Ⅱ土器の発明に至った。その弓矢の発明にオビシヤの淵源を認めるならば、中国、周代の記録に見る三本足の鳥的は新しい。旧石器人類の偉大な発明、弓矢、それを神事として今日まで伝える日本列島、とりわけ関東と中国の関係、これらを巡るお話は講演会報告に譲って、星神社に戻ろう。

七献の儀が終って参集していた人々は屋外に出る。空いた社殿の中央に三本足の鳥が描かれた的、皮を剥いだ桜の若木の弓、弦は麻、紙の矢羽根を付けた篠竹の矢が持ち出される。小学校一、二、三年が三人、世話役に手を取られて、矢的を突く（弓で射るのではない）。最初は鳥を外し、最後に鳥の目を突き刺して終る。その後的を社前の階段から転がし落としてすべて終了。せっかくの手作りの弓で矢を射ることは一度もない。これは弓矢発明以前にま

でこの神事が溯ることを表しているのであろうか。

太陽の死と復活Ⅱ時間の秩序の更新、ビシヤとは日射、と説く萩原法子氏のお話を目の当りに見ることが出来た。（富永長三）

### 4 足が無くなった鴉

一月七日、千葉県多古町次浦の惣熊神社のオビシヤ神事を見学した。

この神社は萩原法子氏の紹介によると、大正六年までの鴉は三本足との記録があり、昭和六十二年と最近のマンガチックにデザイン化された写真には、いづれも足は二本ある。しかし、今回の鴉には足は全く書かれていない。長老とおぼしき人達も、鴉の足にはあまり関心がないようであった。

神主主催の祝詞や玉串奉奠が終わると、弓神事に入る。的は一・五米四方と大きなもので、竹ひごをカゴメに編んで、少し小さい真四角な白紙に、鴉が目一杯の大きさを一羽書かれ、鳥居に吊されている。弓神事の頃には、鴉が太陽を背負う位置になる。

弓は一・五米位の皮付の榎で、強弱二本ある。矢は白紙の矢羽根が付



けられた篠竹で、これも一米位と長い。普通の年は十二本用意するが、閏年の今年は十三本である。

弓は拝殿の前から鳥居の的に向かつて射るが、その距離は二十米より長く、道具が大きい理由がうなずける。氏子総代と次浦区長、新旧当番各二名が十三本ずつ射るわけで、体力的にも大変である。当番の一人が三本当てたが、他は当らず、氏子総代と区長さんは毎年とのことなので、三本と四本当てた。同行した家内は当る度に手を打ってハシヤグ。

弓神事が終わるころ鯉を包丁と金串で、手を触れずに捌き、当番の引継ぎ式の肴を作る。この頃、女人禁制ではないかと気付き、家内は急いで、遠くで見ている女衆の中にもぐり込んだ。聞いた話では、道路を越してはならないそうである。

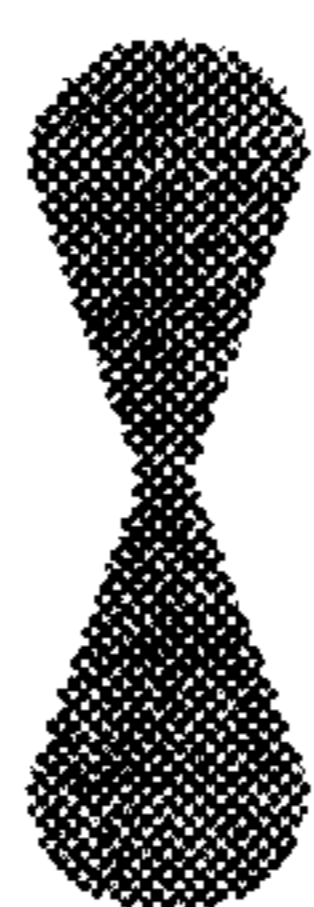
外では、至近距離での射始め、損傷させる。区長さんの話では、以前は子供たちが的を引きちぎって持ち帰ったそうで、更に以前は地主階級のみが拝殿に上がり、その他は焚き火の回りで神事に参加したそうである。

ここには、古日記という文書が伝えられている。その年の当番の名前を記録するもので、そのうち、一年の出来事などを簡単に書くようにな

り、昨年の当番は「阪神大震災」「オウム」を書くだろうとのこと。最古のものは、慶長元年だが、もっと古いものは明治の頃焼いてしまったと云う。『慶長五年庚子年ヨリ寛保二年二千百四十二年古日記之寫』と記された包み紙を写真に撮ることが出来た。古日記に、区長さんの先祖が元和元年に当番をした記録があるそうで、それは大阪夏の陣で豊臣家が消滅した年にあたる。

(鴨下武之)

## 5 白鷺の的也



一月七日、千葉県沼南町香取神社のオビシヤを見る。

ここでは鴉の外に白鷺の的もあるという。神主さんが隣の流山町の香取神社とかけもちのため、巡回を待って十二時半頃から祭事が始まった。型通り、参加者十四名が社前でお祓いを受け、祝詞奏上、全員の玉串奉奠があつて、二十分ばかりで式が終る。「これにて祭儀を終ります」と神主さんが明言されたのは、続いて行われるオビシヤは、神社としての祭祀のほかの行事という意味であろう。

白鷺の的がどこにも見当たらない

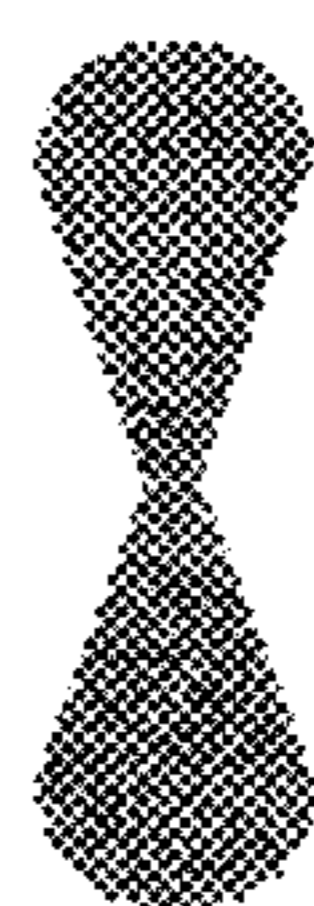
のを不審に思っていたが、何と白紙を三角形に折って竹の先に挟んだだけのものであつた。社殿の東、木立ちの下にそれを立てて、五・六米の距離から全員が交替で射る。的が小さいのでなかなか当たらない。途中で距離が半分詰められた。

次は社殿の西、杉の木の下に鴉の的を立てる。こんどは大きいのでよく当る。さかんに歓声もあがる。弓はヂサ(エゴノキの地方名)の丸枝で作られ、竹矢は長い方が四十センチで二本、あとは少し短いが長さは定められている。作るのは世襲の家柄であつたが、今は世話人が交替で作るといふ。射放つた矢は、昔は縁起ものとして観衆が争って拾い、持ち帰つたと言ふが、今はその観衆も居ない。おしまいに誰かが矢を手を持って鴉の眼を突き刺した。直会の席につくと、皆が口々に萩原法子さんに、この行事の解説をもとめる。「ほんとは私の方が皆さんに聞かなければならないのですが……」と言ひながらも、萩原さんは射日神話のこと、昔中国では三本足の鴉を太陽の象徴と考えたことなどを説明される。「フーム、それにしても、有り難い太陽を矢で射るとはねえ……」と不審の晴れやらぬ人も居た。

三本足の鴉の的もミステリアスだが、同時に弓矢の威力を讃えるという側面からも、行事の意味を考えてみたいと思つたが、何しろ一例だけの見学から大きなことは言えない。

(青山富士夫)

## 6 東京のオビシヤ



一月十三日、新井薬師にほど近い葛谷と中井の御霊神社のオビシヤに出掛けた。的に画かれているのは、午前中の葛谷は二本足の鳥、午後からの中井は、足がなくて飛んでいる鳥が二羽、どちらも氏子たちの間に鳥の由来は伝えられていない。まして三本足など聞いたこともないといつた感じ。しかし、的に三本の輪を画くための分木(コンパス)とか鳥の絵の的は延々と引き継がれているわけである。

なかで興味をひかれたのは、中井御霊社のお供物である。大根を男根の形に削って三本供える。古田先生の言われるように、三本足の鳥と縄文の結びつきを示す名残りであろうか。的に矢を射る行事は、すべての神事が終わったあと、葛谷の方は氏子だけで、中井の方は最後に神主が矢を射て締め括る。この変遷も調



べればオビシヤの性格が分かってくるかもしれない。

因に、弓の材料は葛谷が桜の木、中井はエゴの木、どちらも木肌そのまま使っている。肅慎の楛矢は人參木で作ったというその古事に、色の上で何らかの関連があるのであろうか。矢はどことも同じ篠竹である。

葛谷と中井の真中へんに、縄文から弥生・古墳と続く落合遺跡がある。現在、竪穴住居が一つ復元されている。縄文時代の人々が三本足の烏を信仰し、オビシヤの行事を行ったのであろうか。

最後に、戦前、神田に九ビシヤ、六ビシヤという縁日があったことをご存じのお方はいらっしやらないだろうか。この「ビシヤ」という名前の由来を教えてください（高田かつ子）



二月にもオビシヤが行われる神社がまだあります。

▼二月十一日 千葉県香取郡多古町 出沼 熊野神社

▼二月二十二日 千葉県香取郡多古町 町松木 星宮神社

調査レポートや資料など、お送り下さい。〒181三鷹市中原1・14・8 富永長三

## 定例活動の報告

富永長三

### 12月の発表と懇談の会

十二月は高橋孝男氏をお招きして「わが祖劉邦」と題してお話を伺った。氏は漢高祖帝を祖先とする「大藏姓（多記氏流）高橋系図」を伝えており、十五枚に及ぶプリントを用意され時間一杯お話をされた。

系図の一部を御紹介すると、(1)漢高祖帝。(2)少帝（実は劉邦の二男、如意と号す。孝恵帝の弟、母威姫、呂後の毒殺を察し周昌、如意を守って漢地に十有余年潜居す。呂後の知るを恐れ日本に来る。撰津大藏谷に住す。来朝は前一八三年。）(5)劉観（母巫女也、大藏谷に生る、崇神帝六年漢刻軍書を献じ、十年癸巳將軍を四道に遣し戎夷を平ぐ、此時軍書を將軍に賜うと云う。）(7)劉文（母海人也、年二十五垂仁帝に出仕す。）(11)劉記（景行帝甲戌年、帝美濃国に幸する時警仗の隸を奉る。異相にして頭八角有り、身長八尺二寸、疆勇絶倫、力五十夫を兼る、時の人鬼国候と称す。）(23)劉建（允恭帝四年乙卯、年二十始めて大藏姓を賜る。又丹波多記に封を賜る。多記を以って

氏と為す。後、孝字を賜り孝建と改める也。(26)孝説（継体帝に仕へ時に物部大連、賊徒磐井と戦う。勅を奉じ官軍に援兵を為す。而して戦死。(29)孝倫（推古帝に仕へ春字を勅賜さる、春倫と改号す。天智帝壬戌年、朝鮮人九州の地に來襲す、戦いて大勝を得て凱旋す。明年癸亥大唐に乱有り、援兵を吾朝に請う、春倫從軍し百濟人と共に戦う、軍功に依り官を拜し種の字を賜う。）(30)長種（孝徳帝より持統帝に至る五朝に曆仕す、白鳳元年五月大友皇子を討つ、功に依り筑後国を賜る。）

以下延々と系図は続き、お話も多岐にわたりましたが、残念ながら割愛させていただきました。なお、系図の読みには誤読があるかも知れませんが、詳しくは直接お問い合わせ下さい。

### 12月の万葉集と漢文を読む会

今回は、安豆左由美（あづさゆみ）の歌が三首続くところ（間に一首、於布之毛等の歌をはさむ）を読んだ。

梓弓は、万葉集では、引く、聞く、末、等との係わりで用いられている。ここでは、

「梓弓末に玉纏き かくすすぞ寝なななりにし おくを兼ね兼ね」（三四八七）

この歌は、梓弓の末に玉を巻きつけて大切にするように大事にしなから、将来を気にかけて共寝をしないでしまった等等解釈されている。どうもじっくりした解釈になっていないようだ。

玉巻きの梓弓が、玉巻きの太刀の如きものであるならば、神事・祭事との関係で解かれてもよいのではなからうか。（例えば、オビシヤ報告にあるように、千葉県東金市山田にある貴船神社でのオビシヤには梓弓が使われている。この梓弓の使用がいつごろまで遡るのか、なぜ梓弓が使用されるのかも不明である。これを以って東歌の解釈の証明にはなり得ないけれども）しかしこの事は、次の歌との関連もあっていっそう憶測を生む。

「生ふしもと この本山の真柴にも 告らぬ妹が名 象にいでむかも」

しもと、とは若い小枝、もと、で本山にかかる。本山とは、端山あるいは山の名前。真柴は、柴に暫をかけて、ここまですが序とされる。真柴



にも告らぬ、とはほんの少しも口に

出したことのないの意味であるとい  
う。象に出でむかも、は三三七四  
「武蔵野に占肩焼き」で既出。しか  
し真柴には別の解釈がありそうだ。

卷二十防人歌・四三五〇に

「庭巾の阿須波の神に小柴挿し 吾  
は斎はむ帰り来までに」

とある。阿須波の神、とは「古事  
記」に大年神の子と見える。その阿  
須波の神に小柴を挿し、無事の帰還  
を祈っている。この小柴は神籬だ。  
すると真柴も同様に解しているの  
はないか……等等いつも勝手な意見  
をぶつけ合っている。もちろん結論  
は宿題になる。

漢文「隋書」は都合により休ま  
した。今回は「隋書」東夷伝です。  
万葉集も漢文も自由な意見を出し  
合いながら、じっくりと進めていま  
す。ぜひご参加ください。

### 古田ゼミナール 12月3日

今回は三種の神器を尋ねての韓国  
旅行のお話から。まず三種の神器と  
いう用語について。日本書紀には三  
種の神器なる用語はなく、三種ある  
いは二種の宝物である。三種の神器  
の初出は北畠親房の「神皇正統記」  
にみられること等、藤田友治氏の研

究にふれて話された。

三種の神器なる用語は近畿王朝の  
創出になるのではないかと。九州王  
朝は天孫降臨を神代のこととは認識  
していない。一方近畿は天孫降臨を  
天神段階、神代のこととして認識し  
ている。神代の事柄は神代の巻に出  
てくる事柄であるから神器としたの  
ではないか。また続日本紀は聖武天  
皇紀に見える。つまり日本書紀製作  
後の認識を表すと。

その三種の神器が韓国、咸平郡草  
浦里遺跡より出土し、その鏡が吉  
武・高木遺跡出土と同じ鏡、多鈕細  
文鏡であり、その年代は草浦里が古  
く、吉武・高木が新しいとされてい  
るが、出土物の組合せの様相は、吉  
武・高木は素朴であり、草浦里は発  
展形であり、矛盾がある。この問題  
は次号掲載の講演会報告に譲る。

また、和田家文書に見える「進  
化」なる用語が中国からの伝来であ  
ろうこと、あるいは三内丸山遺跡の  
巨大木柱建物を彷彿させる記述や絵  
巻のこと、その絵巻の元となった多  
数の画譜等のお話もあった。

さて、いつもの朗読は「支那書物  
魏志倭人記之覚」「邪馬台国の創  
と続き、ここでは、「宋書に依れる  
史書に安東大將軍倭王とせば是れ  
な天皇世代に合伝作説なすは、日本

## 火の国の古代を

### 訪ねる

木村 由紀雄

本誌TAGENの表紙カットは、  
装飾古墳の代表の一つ、珍敷塚古墳  
(福岡県吉井町)の壁画である。「天  
の鳥舟」を表現しているのではない  
かといわれるが、諸説あるなかで、  
古田先生は倭人が太平洋を渡った伝  
承の反映という見方を示しておられ  
る(「邪馬壹国の論理」)。装飾古墳は  
九州と東国(茨城、福島中心)にし  
か存在せず(その他の地区にも例外  
的にあり)、しかも圧倒的に九州に多  
いことは何を意味するのか、古代史  
の謎という言い方がよくされる。

昨年末、熊本に出張する機会があ  
り、仕事の合間に地元の人々の好意  
で熊本県立装飾古墳館を訪れること  
ができた。九州の装飾古墳といっ  
ても地域的にはつきりとした特徴があ  
り、福岡県、熊本県に集中している  
ことは周知のところであろう。装飾  
古墳の数では熊本がトップだが、特  
徴的なものは福岡に多く、議論の対  
象になるのも福岡が多い。質の福岡、  
量の熊本といえようか。熊本の装飾  
古墳にもまた地域的な特色があり、

博物館のあるのは菊池川流域の古墳  
地帯である。この博物館はユニーク  
な建築家として著名な安藤忠雄氏の  
設計になるもので、九二年に完成し  
た。単なる出土品の展示に止まらず、  
古墳群と周辺環境を一体として見せ  
ようとする環境博物館というコンセ  
プトを打ち出している。チブサン、  
井寺、弁慶が穴など有名な熊本県下  
の装飾古墳がレプリカで再現されて  
いる。保存のため本物を自由にみる  
ことができない現在、最善の方法で  
あろう。チブサン、千金甲などの装  
飾をみて、筑紫とは異なる肥の国  
火の国の古代に思いをはせる。

また、菊池川流域は「肥後古代の  
森」という名称で山鹿、鹿央、菊水  
の三地区が整備の対象になっている  
が、装飾古墳館は鹿央地区の中心施  
設である。菊水地区の中心は江田船  
山古墳と歴史民俗資料館である。こ  
こも急いで訪れたところ、例の鉄剣  
の文字はミズハワケ(反正天皇)と  
ばかり思い込んでいたが、解説はワ  
カタケルとなっていた。稲荷山の鉄  
剣の文字が発見された後、改められ  
たのではないかとピンときたが、詳  
しいことをご存じの方に教えて欲し  
い。



古今に通ずる史家の習へなり。宋書諸書にいでくる日本国なる邪馬台国亦は倭国と号して記せるに、是れぞ大和を云うものにて候えとぞ、今なる支那学人は云うなり」等とある。

また「邪馬台国王之事」には「安東浦林崎荒吐神社譜より」として、山大日之国之命以下、安日彦、荒吐五王に至る系譜を記し、「右の如く、東日流国古宮に遣れるを祖系図とせば、誠にもつて邪馬台国なるを偲ぶるに、日之本国に神代あるべきもなく、民族の起こしたる国造りなり。元録十年八月二日、藤井伊予」等に記されている。楽しき哉、東日流外三郡誌。

## お便り

### 万葉集の「おおきみ」

町田市 深津栄美

「万葉集と漢文を読む会」の報告に、大王問題のことがちよつと出ておりましたが、この「おおきみ」という称号の万葉集における表記、私が調べた限りでも次のようです。

- 柿本人麿では、①王 ②大王 ③於 富吉美 (二三九)  
 山上憶良では、大王  
 大伴家持では、①王 ②大王 ③大君 ④大皇 ⑤於保吉美 ⑥於保伎見 ⑦於保吉民 (三九六九のみ) ⑧於保伎美 ⑨天皇

大伴池主では、憶保枳美 (三九七三) 防人の歌では、

- ① 於保伎美 (三四八〇 四三五八上総国 四三九三〜四下総国 四四一四武蔵国)  
 ② 於保吉美 (四三二八相模国)  
 ③ 意富伎美 (四三七三常陸国)  
 ④ 意保伎美 (四四〇三信濃国)  
 以上のように書き分けが行われています。特に家持の場合、有名な「海行ば…」(四〇九四)の長歌だけでも①〜⑤の書き分けがなされており、とても同一人を表わしているとは思えません。(中略)

## 紹介

平野雅曠著  
 倭国王(くまそ)のふるさと

### 「火の国山門」

熊本市在住で、古くからの多元史観に立つ古代史研究家、本会会員でもある平野さんが、右記の新著を刊行されました。同氏より高田会長への、風格ある御来信をもって、内容紹介に替えさせていただきます。

……別便で拙著一部贈呈致します。お世話になりました例の「松野連」系図を基にした論考が目玉です。御高覧下さい。

出来れば「多元」紙の余白にでも周知方をお願いしたいのですが、五百部刷って別に書店にも出していない。原単価が二五〇〇円を超えています。定価二〇〇〇円として会員割引も出来兼ねますので、御了承下さい。別に郵送料三一〇円は切手で結構です。

倭国の原点を突止めたと自負しているのですが、呵々。

▼宛先 〒862熊本市田迎町出仲間 369 平野雅曠

### 3月の発表と懇談の会予告

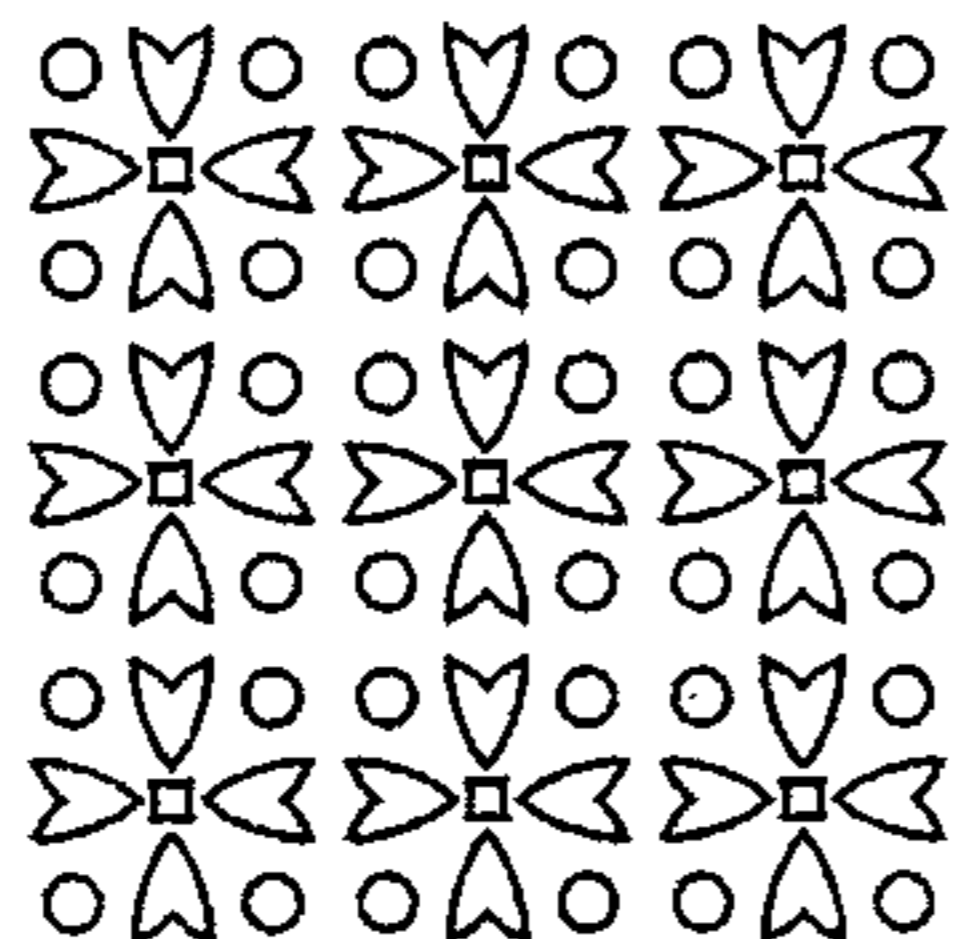
## 「よくわかる考古学」

▼ゲスト 砂田佳弘氏(かながわ考古学財団調査部)

▼3月17日(日)午後1時より

▼文京区民センター

今回は古田武彦氏のご紹介により砂田氏に講師をお願いすることになりました。砂田氏は、長年にわたり神奈川県内の遺跡調査に携わってこられ、最近では綾瀬市吉岡遺跡群の発掘調査及び出土品整理を担当して来られました。特に石器の研究を専門としておられますが、当日は遺跡調査の現場ならではの話を色々お聞かせいただける予定です。考古学にも興味をお持ちの多数の方々のご参加をお待ちしています。





# 事務局便り

## 古田ゼミナール最終回のご案内

▼日時 3月1日(金)午後6時より

▼場所 文京区民センター

一年以上にわたって続けてきました古田ゼミナールは、古田氏の大学退職とそれに伴う京都への移住により、今回を以って最終回となりました。

今後は古田先生の講演会も数少なくなると思われ、今までゼミナールには出席されていなかった方々も、今回はぜひ出席下さるようお願い申し上げます。

## 新年度会費納入のお願い

本会の年会費は、「四月より翌年三月まで」となっておりますので、平成八年度の

年会費(四千円)を郵便振替にてお振込願います。

▼(振込先)「多元的古代」研究会・関東  
▼口座番号 00170・9・768777

なお、昨年十二月以降に入会された方に対しては、既に平成八年度会費納入済としております。

## 新規のご入会を歓迎します

「多元の会・関東」にご参加ください

本会は「古田武彦氏の提唱された、歴史を多元的に観る考え方に賛同し、それを継承発展させる事を理念として、日本の古代の真実の姿を研究」する会です。このような取組方針に賛同する方々の入会を歓迎します。本会では隔月に機関誌を、中間月には八ガキ通信を発行する一方、各種の月例会を開催し、また、年間数回は外部講師を

招いての講演会、遺跡調査旅行などを実施しております。

▼入会ご希望の方は、住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記の上、入会金(千円)及び年会費(四千円)を、左記へお振込願います。

▼(郵便振替)「多元的古代」研究会・関東  
▼口座番号 00170・9・768777

年会費は、原則として「四月より翌年三月まで」となっております。ただし、只今ご入会される方に対しては、平成八年度会費として登録します。

## 博物館案内

神奈川県立歴史博物館 3月24日まで

特別展「銅鐸の美」— 弥生文化の謎と  
ロマン (横浜市 関内駅下車)

葛飾区郷土と天文の博物館

3月17日まで

「発掘最前線—かつしかの遺跡展」  
神奈川県立埋文センターシンポジウム

「縄文時代の敷石住居の謎」

2月10日 午前10時〜午後4時

(会場) 神奈川近代文学館ホール (JR  
石川町下車) (問い合わせ先) 埋文セン  
ター TEL045(252)8681

◎投稿をお待ちしています◎

会員の皆様のご意見や、各地に伝わる未知の史料などをお寄せください。

〒151 渋谷区本町1-7-16・1102

「多元」編集室 青山富士夫

TEL03(3377)7809



◆角川選書「南方神話と古代の日本」その中である著名の学者が、日本書紀と隋書倭国伝とを比べて、「遣唐使」とあることなど以下、数々の矛盾点を指摘しながら……日本史の先生は苦慮しておられますが「私は簡単に考えています、合わないのは国が違うから……倭国と大和王朝が同じ国だと思わなければ、すべてが解決するわけです」◆読んで驚いた。一介の読書人である私は、既に二十二年前からそう考えている。「失われた九州王朝」を読んだからである。この著名な学者は、既にそれ以前からこの説を唱えておられたのであろうか◆書いてあることを書いてある通りに読めば、A II Bではない。余りにも平明な論理である。であれば先にそう読んだ人があろうとなかろうと、敢えてことわるまでもない……というのが斯学界的倫理であろうか◆近頃新聞雑誌に、三内丸山を縄文都市と形容するのをよく目にする。あたかもそれが広辞苑にでも載っている通用語であるかのよう。この用語にもしかし、二十年前阿久遺跡発掘の際に創唱者がいる。単なる気どった表現としてではなく、縄文定住という学問的判断に基づいた言葉として、である◆私たちは常識が常識となることを歓迎する。だがその背後の学問の歴史が忘れられてはならない。(肥)

## 多元の会 カレンダー

会場は、全て文京区民センターです。

2月

4日(日)午後1時  
発表と懇談の会 話題提供/阿久津恒也氏「江釣子古墳群とアイヌ語族の分布」、下山昌孝氏「東北の古代官衙遺跡の調査報告」

25日(日)午後1時  
万葉集と漢文を読む会 万葉集は巻第十四「東歌」相聞歌、漢文は「隋書」東夷伝です。  
\*山田宗睦「日本書紀講座」は、講師の都合により2月も休講です

3月

1日(金)午後6時  
古田ゼミナール(最終回)

10日(日)午後1時30分  
山田宗睦「日本書紀講座」

17日(日)午後1時  
発表と懇談の会(今回のみ第3日曜です) ゲスト/砂田佳弘氏(かながわ考古学財団調査部)「よくわかる考古学」(13ページ参照)

24日(日)午後1時  
万葉集と漢文を読む会

4月

7日(日)午後1時  
発表と懇談の会

◆当会へのご連絡は、会長/高田かつ子 TEL048(881)9111 事務局/下山昌孝 TEL044(522)4185まで